

長崎土産

全

ル 4
1476



吳越西檝等之數條
名曰長崎土產欲使
人人不吝必親入筭境
而哭知其勝狀壯觀
請說於余余官講經
不暇固辭強止回錄

其大指凡贈王人云
弘化丁未春二月
有奉惰農饒田
集義
唐少原書
王孫

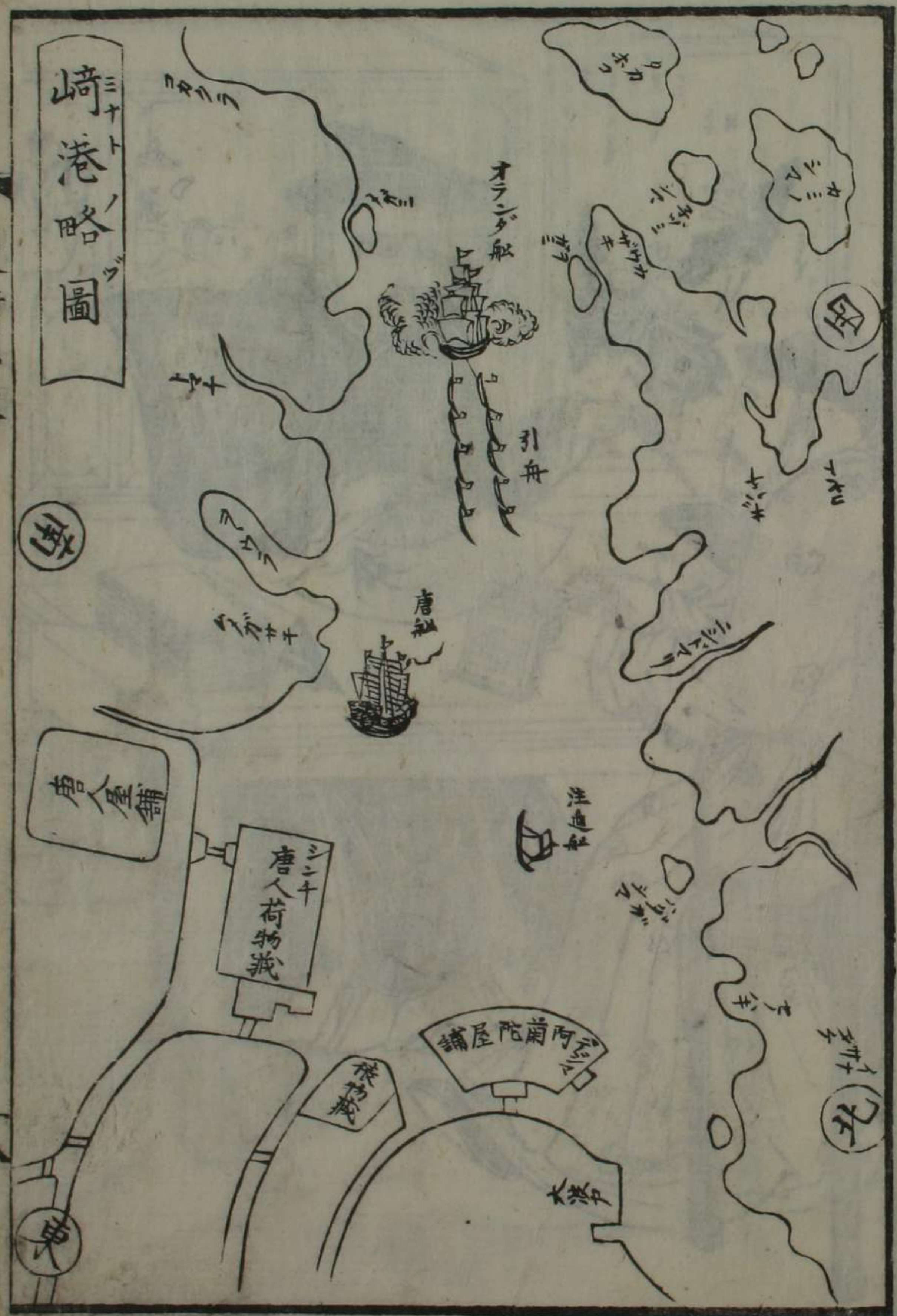


長山二五

日野前大納言資枝卿御歌



唐人^唐迺美以手曾奈
 布留船あ海多味
 那冬能とや耳か
 須志阿さ那岐洋史



清朝人

春去甚來忽一
年各逢元旦似前
綠屠蘇淺飲三
杯醉 桃符高懸萬
戶連花媚鳥鳴增
華月風清日麗
滿山川 輝家問我
崎陽事 知說雍穆
竟舜天

朱子章



長地土齋





HOLLAND
SCHE

Wurmerk.

人ニモシ紅ヲ

クロボウ

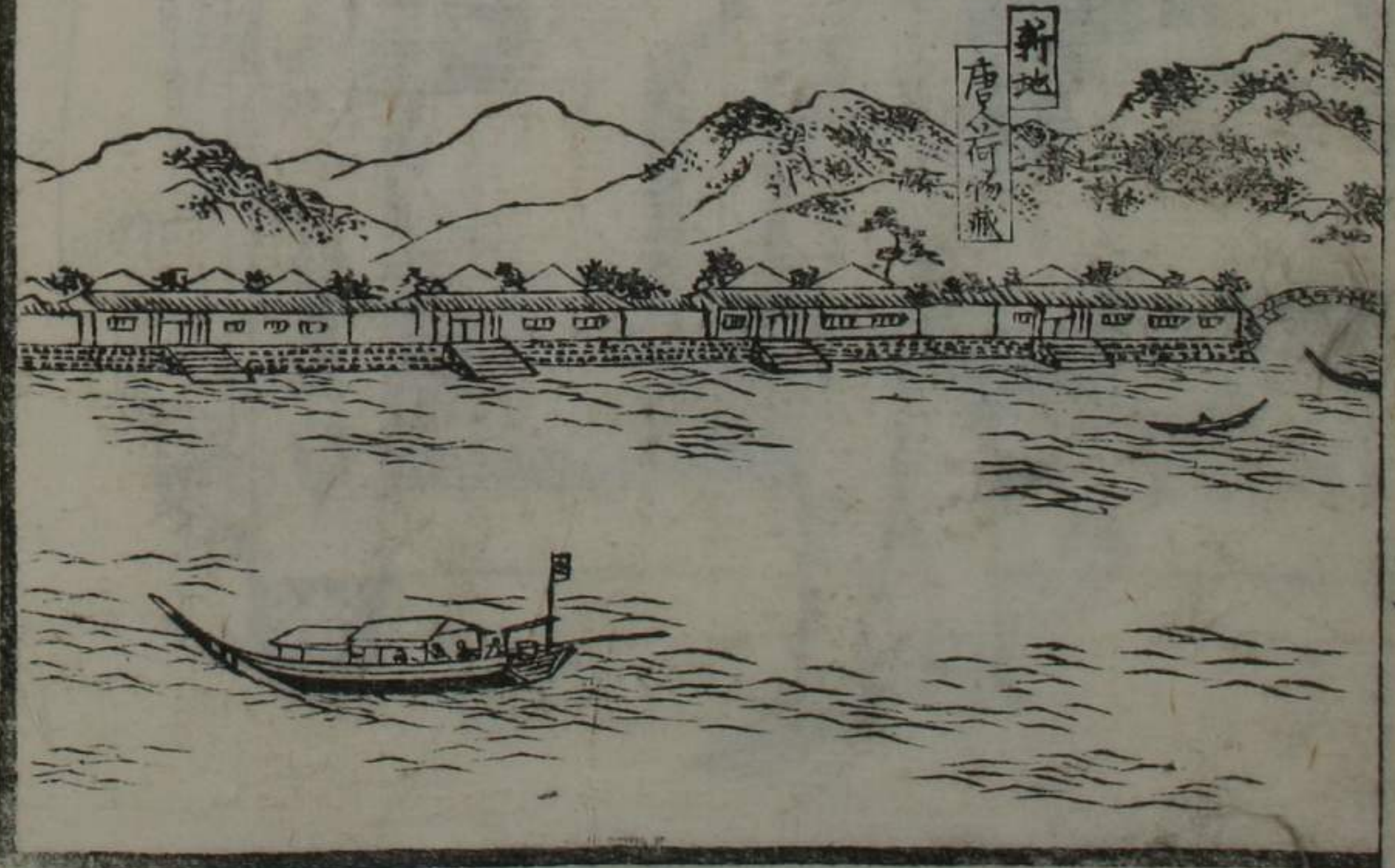


長山土産



孫靜濤

青雀飛來泊海邊
 信通吳越意
 然孤舟中土人面
 此應通崎陽別有天



珠をあるは比砂精ハ水の如くあり
 素堂

唐館 タウジン ヤシキ



長山

明笛何人慰静閑
 昏前峇聽弄易關
 清庭声散泛樓夕
 亭落句吳於越間



長山



無コンビラ凡山



東海墓ハ澤司東
海氏ノ墓ナリ春
徳寺後山ノ半腹
ニアリ石門石欄干
ヲ設ケ墙壁ヲ圓ニ
シ花卉ノ雕飾アリ
或ハ文字ヲ刻ス尤
其巧ヲ尽セリ



東海氏墓

十四

目鏡橋



烽火山

烽火山

聖堂



扇嶼夕照

高場

音全

夕日夕々何れの海に

うねりまきも

きりりやのき

まきゆりりまき

大船の巻



オランダ
館

丸山港女

丸山港女

OLIFANT

文化十癸酉紅毛船持渡
 象牝 出所セイロン 歳三才
 高六尺五寸
 頭ヨリ尾キハ迄七尺
 前足三尺
 後足二尺五寸
 足回り二尺五寸
 鼻長三尺五寸
 尾長四尺五寸



長崎

十五

Holland troust

文政己丑七月蘭船載一婦人來、即經
 菲列奴之妻、名彌、年十九、隆鼻、深目、肌
 膚透莹、景巧、女技、旁吾書、画、聞、婚、後、二
 閏月、其夫、祇、後、于、日、本、繼、之、情、不、忍、離
 吾故未云



長崎土産

十六

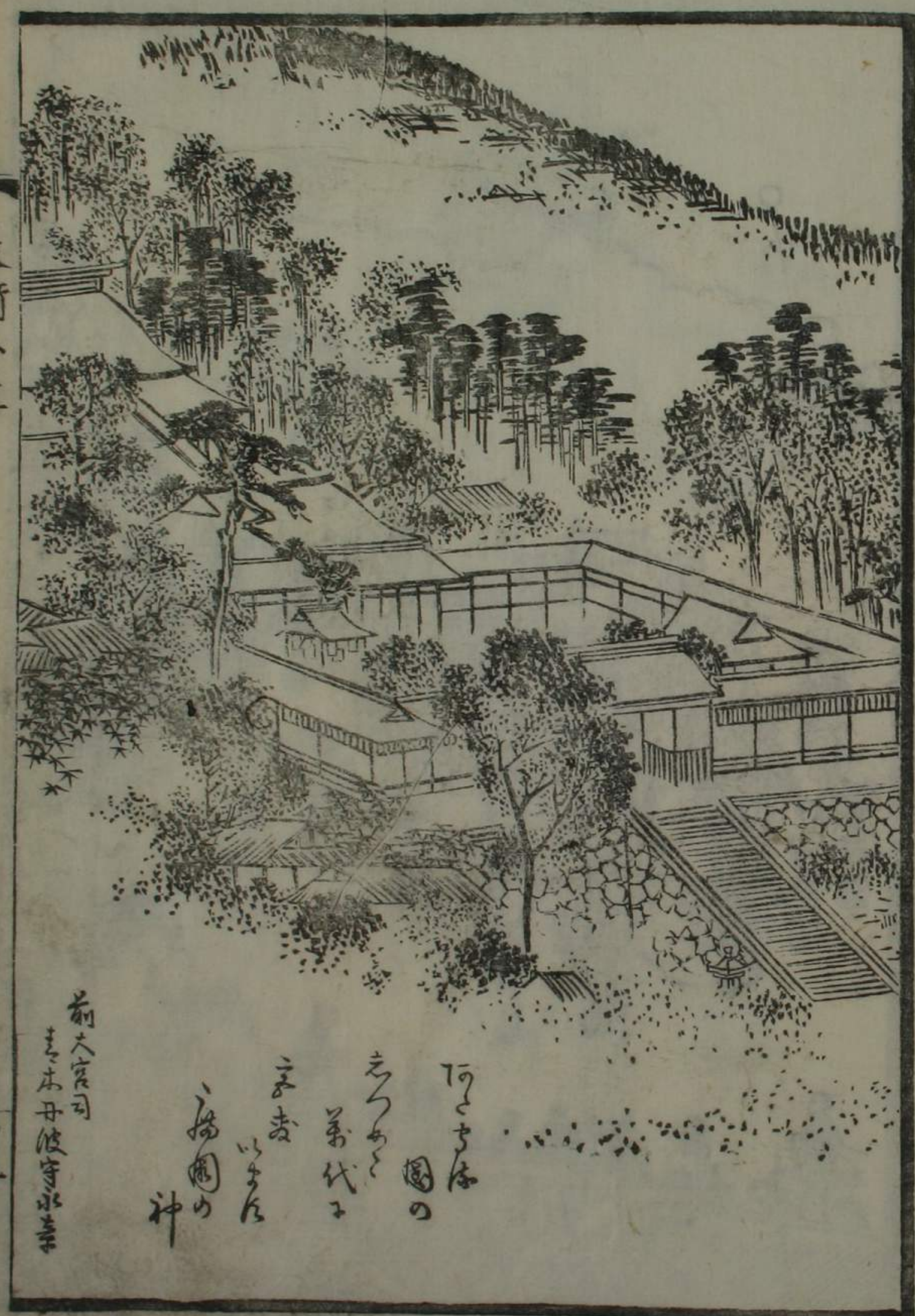


長山北

諏方社

海をく吹くまはるぬき此道凡のめえく及てぬ諏方のいぢり
 六のそに此ちさりか九に長崎やまもの此よりうすゆふーて
 冷泉前大納言為村卿

重岡



前大官司
 まはるに彼守永幸
 十九
 何とて
 園の
 茶代子
 まま
 以て
 園の
 神

其二
神事
踊子

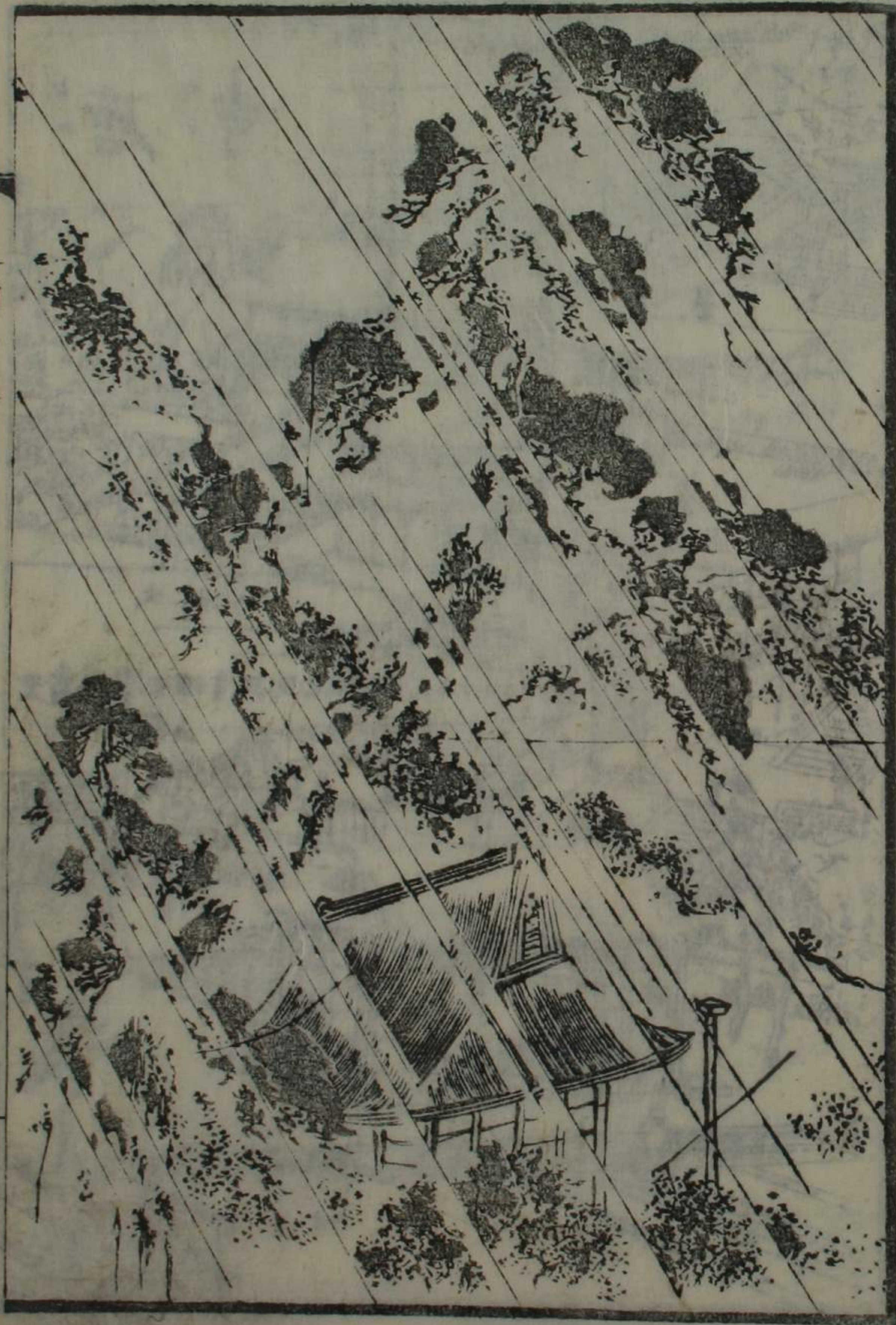


九月神事出向
宮終、百戲市
西東、絳囊誰佩
某、莖女、新服言
裁、總角、童童、尾
看、柳、弦、曲、卷、簪
絃、急、管、列、列、工
若、狂、終、日、人、皆
醉、盃、与、周、時
八、塔、同

左、回、南、家



丸山町



三崎山

七二



長山北庭

九

慈像千年八尺高通身手臂不知勞
 氣衝妖孽空羣滅影射魔軍拂地
 塵一鎮御崎多象刹七分名利放圓
 毫行基到處便生事 眉目依然
 菩薩豪

高玄塔

イハウジマ



唐人墓

天空海闊無雙地
席伏龍潭不二門

第一峰

中門

七二



唐寺

聖壽山福禪院琉璃巨鍋和貳年次壬戌仲春

大釜

長山

六

百尺松杉作翰屏重、樓閣迥
蒼冥象玉隔水天然白獅子臨
春分外青十里煙花歸指顧
千家燈火照禪高雲堂梵靜聞
箫鼓中國帆檣泊晚汀
唐山道本



長崎土産

唐館

唐館造立の事ハ元禄元年戊辰九月廿五日經營始りて
翌年の四月十五日小功成就ととまふ

唐船の入津とふ事ハ夏船冬船とて年小兩度有り已
港小来り碇入りし後ハ唐人悉く館内小移りゆき載来
所の貨物皆新地乃庫へ入き朽る貨物運送の時ハ諸吏是
次監一丸荷役精荷役等の名目有り船中人衆乃名称
正船主頭 副船主頭 財副 總管 客長 板主

影長 ホウキシ 按針後也 ボウシ 船中水手ヲ ボウシ 影計ト云 ボウシ 按針後ハ針ヲ ボウシ 考ヘ方角ヲ ボウシ 教ヘ水手ヲ ボウシ 下知シテ ボウシ 船

舵工 ボウシ 後也 ボウシ 頭控 ボウシ 後 ボウシ 香工 ボウシ 花 ボウシ 魂神ニ香 ボウシ 押工 ボウシ 頭 ボウシ 大工 ボウシ 押工 ボウシ 直庫 ボウシ 後 ボウシ 鼓

大繚 ボウシ 後 ボウシ 一什 ボウシ 大 ボウシ 二什 ボウシ 三什 ボウシ 亞板 ボウシ 後 ボウシ 總喃 ボウシ 後 ボウシ 老大 ボウシ

頭 ボウシ 工社 ボウシ 誤ナリ ボウシ 泉州ノ ボウシ 葉ニテ ボウシ コンシヤト云 ボウシ 小廝 ボウシ ナリ ボウシ 等 ボウシ 有リ

新貨庫 唐館此西の海中小あり元禄十五年建唐船乃

貨物を入きおかり處あり

唐人踊山春二月の初小これ代行土神祠の祭禮あり二月二

日と祭日と前後三日乃同此事あり土神祠の前高大

ある舞局の臺代設を持色小粧ひ在在館此唐人

其事小巧なるの種くの衣冠袋束衣着け綾羅錦繡を装ひ

臺上り出て歌舞成るなり其事体ハ水滸傳三國志或ハ稗官

小説の内代用や多り樂器ハ鈞鐘拍板囉叭噴呐鈔鐘笛大

鼓 コ 片張 カ と 提琴 テ 朋及ハ柄 ヘ も小竹 コ 竹 タケ 以てこれ代作 カ 蛇皮 ヘ と張リ カ 二腔 ニ の糸 イト と カ 尾代通 ヘ へてこれと カ 三弦 サン 木 キ を作り カ 蛇皮 ヘ 代張リ カ 糸 イト ハ三筋 サン

以て指りたり カ 三弦 サン 木 キ を作り カ 蛇皮 ヘ 代張リ カ 糸 イト ハ三筋 サン 小て拍子 カ 成るなり是他

邦小比類に美観あり

○金毘羅山紙式鳥會

金毘羅山ハ崎中の北小あり一名魚丸山又瓊杵山と云麓小曠野

あり三月十日金毘羅大権現の祭日小て其日ハ大人小兒各々行

厨代携へ酒樽を擁して曠野を以り紙鳶小硝子後代はけて
 共ニ勝負を決まされ代はけけけと云蘭人此持渡ふ硝子
 器の割る代至極細末少々糊と和し是を葎くぬぬ目小
 乾し束ね置名は多々硝子ぬぬと云紙鳶の糸時小紙鳶放
 くとまを流し遠て是代五十間百間二百間紙鳶の大小よりて
 着け午許ハ皆平生乃葎し後代用かれと呼て根ぬぬと云
 互ハ此法と以て紙鳶放つ野を隔る谷代越て空中小
 相争ふ彼より此よりぬぬと交り風に乗るて摺合逐小切きそゆく
 代負と定む且風強弱より勝負乃遅速有り能揚るもて

切る時を雲入り霞小消て境代越てわろ素くも業乃巧拙
 其人の手の裏小あはれ紙鳶の製一々ぬぬと云此時也
 専ら巧むは代用也是則初昆崙奴の製作小々風放ちて
 左右とて代便利あり凡はけけけに至りて見輩の樂
 けけけ非也亦春時の奇観なり

目鏡橋

酒屋街小あり寛永十一年興福寺住持唐僧如定築是長崎
 百橋の始也慶安元年平戸氏好夢と云人重修せ其形
 象の似る代以て目鏡橋乃名代得たり

紅毛船

紅毛船の来津を伝へ季夏を初秋小至るまで候に
其始り寛永十八辛巳の年より今小至るまで年おとに
たどるし渡来の紅毛人乃名称をヨツブルホーフト

ハツクホイスーストル 魚と伝 日手 日手 日手 日手
テイスペインシール 厨所諸雜 費支配後 ニゴール

セイブツクホードル 高賣物 芝キリイバア 筆者 アレステント 筆者

ヨツブルメーストル 林 外 日手 日手 日手 日手
ヨンドルメーストル 下外 日手 日手 日手 日手
ホフメーストル 厨所後

ス子イエル 縫物 日手 日手 日手 日手
テイニムルマン 大工 日手 日手 日手 日手
カビタイン 船頭以下 日手 日手 日手 日手
カビタインロイ 船後 日手 日手 日手 日手

トナント 針後 日手 日手 日手 日手
ロイトナント 針後 日手 日手 日手 日手
ジュウロイトナント 針後 日手 日手 日手 日手
テルト 針後 日手 日手 日手 日手

メーストル 日手 日手 日手 日手
ボーツマン 惣水手頭 日手 日手 日手 日手
ボーツマンスマアト 日手 日手 日手 日手
シキイマン 日手 日手 日手 日手

シキイマンスマアト 日手 日手 日手 日手
コンスタール 厨所并食用 日手 日手 日手 日手
ホトリイルスマ 日手 日手 日手 日手

ボトリイイス 日手 日手 日手 日手
ボトリイルスマ 日手 日手 日手 日手

アト 日手 日手 日手 日手
コツクスマアト 日手 日手 日手 日手
シケーブステインムルマン 日手 日手 日手 日手

セイルマール 帆縫 日手 日手 日手 日手
スミツツ 銀治 日手 日手 日手 日手
コイフル 桶細 日手 日手 日手 日手
クワルテイル 日手 日手 日手 日手

メーストル 船支配并水手夫 日手 日手 日手 日手
トロンベツトル 日手 日手 日手 日手
等分り 日手 日手 日手 日手

紅毛館

紅毛館ハ海中不あを門前ハ即ち江戸街通り状ハ扇面
似りよつて扇嶼と称し俗小出島と云館中不あを年々

定まる 祝日ハ阿蘭陀正月 冬至の後十二日 戦勝日 彼國の六月十八日

上月節の後十一二日此ハあり 日此ハあり 水リ ジヤカタラ 赤業刺兒の誕生日などなり 此日ハ

紅白青の旗ヲ建てて盛饗と設けりて 彼中大小賑ハ

せりこに食冊ヲ奉ぐ

阿蘭陀正月献立

大蓋物 味噌汁 鶏肉飯 大鉢 潮煮 鯛魚 鱈魚 鉢 牛乳 鉢 牛乳

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

食小粒一羽又コービー日本の大豆小粒 是は磨一碎き湯水木の葉あり
小入煎白糖を加へ常服を我國の茶飲用が如し

○大波戸鉄丸

大波戸ハ波戸場なり西衙の下にあり廣さ東西七間南北北五間北の方堅十四間横五間半の入海なり是風波烈しき時後船を挽入き風を凌ぎ波を便りて置かす之也
側小鉄丸あり周圍五尺八寸重さ唐目一千餘斤といふ
即石火矢の玉なり

○聖靈祭

聖靈祭ハ例年七月十四日十五日あり曰十三日の昼後を各家に於て壇を設け其上小菰の編み籠を志し名づけて聖靈籠といふ 佛間の位牌を移して立并べ是は聖靈棚と稱す代々の諸聖靈此夜の丑乃刻を待て我家に小入り来候とて婦人女子圓團盛饌の設け成をし門小八家紋をつけ大なる燈籠を挑ぐられは門燈籠といふ古風守の如く深更に至るや戸を鎖ざりて之は中夜愚老姫の輩ハ實小七者の十万里乃浄土を銀難辛苦し々来々と思へり又棚経と云事阿を雲水の僧諸宗此比丘尼等案内もむゞ々家々小突入し々靈前小向ひて誦経

在名は多々棚経といふ是許多の布施物成利するふあるの
 同十四日種々の佳饌成設け朝夕靈前小供ふ尤料理は皆人先
 祖より仕来り有る老婆をどける家へ堅くこれ成守て
 古式成変む事なし此日申の中刻比るを男女各行
 厨成携へて墓所不至り酉の刻ころ成待て燈籠成塔前小
 挑ぐ一所の點燈或ハ三十或ハ四十新死の家ハ百餘燈小する
 是親族知音の贈り処多る墳墓ハ預トハ燈籠掛成あり
 といてこれ成揚ぐ諸吏ハ多く上下成着し高家ハ平服小て
 参詣を小家下賤の輩を塔前小送成展へ毛氈成鋪て酒

宴成催し相共小奉と打て與成催を成て長崎の地ハ山々相
 環る其りハ皆梵刹相連る処也一教多の墳墓小萬燈
 成點したはさる他邦小比類多る因て羈旅成僧俗一ハ
 これ成祝てハ各奇觀と稱せざる多し一板成の中刻ころ小
 至りて數万の點燈漸く消滅し人皆山成下りて家へ
 歸り因て墳墓點燈の間ハ老漢阿婆成家成守りの又
 諸國遍歴の僧侶四國六部乃徒衆の門小立ち鉦成叩き
 木魚成打て回向し念佛の聲るるは

附 法良領といふ事あり家々聖靈の壇脇小喜縁の靈魂成

祭王佛、供饌の餘り、或は供ふ朝夕取おうとに臨んで奴婢
も、或は食する事と思む故、小非人乞食の輩、或は
王小田子、或は籠に提げ、水と乞ふて町に或は廻る名に
けて法界飯といふ

同十五日、竟祭王并墓所参詣十四日の式、此れ如く世夜丑の刻、
或は聖霊流あり、預め竹に挽め、船の形に造り、麦藁
に以てこれとつみ潮水の防と、帆柱に立て、白紙を以て
て帆と、帆を極楽丸、西方丸、弘誓丸、浄土丸、或は六字に
名号七字の題目各宗前、小随ふ処、或はつて大書し、又ハ觀

音地蔵の像、或は画き、四更の鐘と聞て、皆茶を煮て、靈菓、小供、
或は三番茶と云ふるに流し送り、或は暫く有て、供物の湯團、菓実の類、
悉く壇上よりおろして、藁船、小槌、舳、船、少敷十の竹、乃竹
に、或は線香、或は種々の燧、或は繩の上、挑ぐ、或
人、巨高の家、ハ奴婢、或は有、或は貧賤のもの、ハ父子兄弟、或は
或は昇て海濱、小送、或は素より、船具、或は設け、或は風、或は
飄蕩、或は水面、或は帆、或は出恰、或は船、乃、順、凡、相送り、洋中、小漂、或は
通俗、或は或は聖霊流、或はと、或は町、或は小家、下賤の輩、ハ家、或は
舟、或は造、或は或は近隣町内、或は巨、或は一艘、或は製作、或は

慷慨一前の宮司の孫公文九郎左衛門小舘一三社併せて
 同殿小祭り長崎鎮守再興の事以謀る九郎左衛門大
 歡以一封の譲り杖以賢清小典ふ是に於て書改して
 京州吉田兼英卿小達より乃処即ち雜掌鈴鹿采女山小
 命ト答書して許容ある実小元和九年春二月より翌寛永
 元年官小申一社地以形以譲入圓山の地今の松森是より正徳四年
便多より以て今の
五圓の地小遷宮ある以寄附せりこれよりして後賢清いしく精誠と
 抽んで、欽崇する事固一四九年兼英卿より更小金重院以
 宮司とし其子伊兵衛永忠以宮内太輔小任し祠官も補せ

の許し以蒙る同十一年祭祀以終せん少と譲以官府の許諾
 以得て九月七日九日を以てト一神事以行以神輿御旅所小渡
 御所より又御供町と稱し通俗神事町又隔町云町云々に
凡七年以隔てこれと改む長崎七十餘町
 の内十一町府街小圍以と五次第以定む即ち舟津町本博多町柁
 島町平戸町新紙屋町延享八年改て
幡町とす麴屋町馬町本紙屋町濱町銀屋町
 諏方町これ其時の煩列あり翌十二年丸山町寄合町二町町
華街より官
 聴お乞て遊女以出し猿樂の曲舞或は切の舞以あしそ
 姑わいん高尾音羽と是と小舞
と云小舞と
 以る二人の傾城あり廟前小献ぐれを後内町外町の諸町これ小慎以
 見子以して種々の踊と催し其後小後毛今猶華街の諸町

小竹茂立並へ簾と垂れ幕茂張り座敷移り美酒佳饌と後
 けて賓客茂郷食應を見物と云 過く小男女老幼嬰孩を抱へ
 童稚茂携へて視るもの堵れぬ 誦場ハ身一旅方社身二西衛
 身三御旅所身四東衛身五岩原身六縣令以上町々頻列
 茂立ておとる是よりおひく知音の方小玉丸を誦場おた
 遠近の士女田夫野姬肩茂より見物群集茂ありと
 却旅所小唐人棧敷あり在彼れ唐人技十人こに到りて誦茂
 へは素よる唐子誦と称するものハ唐土此風俗ハ慣ハ水滸傳
 三國志等此諸書よる技を取或ハ挑園小義茂結ふの誦り

預讓雙言茂較まの誦又ハ草廬三顔呂望投綸布袋衆見茂愛まは
 等の趣向其技挙て我之び四五歳の稚児ハお雜王彼國の衣服
 茂着け帽子茂若華音の歌茂いハ喇叭噴呐太鼓笛と以て拍子と
 為る也見物の唐人たのづめ故園の情茂動きて涙と伝まも
 あり又ハ奥小入て硝子ハ算鉦錫の指環これ茂掬して誦子ハ投
 典ふも何重羈客おのく其光景茂るる感とあるごハあり
 又蘭人の棧敷もハ所小あり然れども是ハ其年の在彼れ
 甲比丹此心ハふら也二年ハ定式に在りて若出てる
 事ありハ甲比丹邊登苗此茶おのく倚子小憑りて崑崙

奴河とに從へ四方の弱多却てふ成るる奇觀と一愉快と
せがほへる
甲比丹大波たふあ事河まは出嶋門前より我表成
後ハル等の衛人等にてあつて踊りあつたり

同十一日大槩九日の式にたごとく西遊女町并町へ踊り趣向成り
此日ハ外浦町大村町本博多町堀町本興善町豊後町櫻町
勝山町西馬町通り筋あり踊場ハ御旅所成り第一と一々西衛
諏方社ハ次に次ぐたり安禪寺廟前ハ踊成献するありそ
お九日の次列準也

神楽渡御九月七日丑刻社司神膳成供一神楽成奏一
大
按成踊て三柱此神成神樂三基小遷一奉り寛政のころより

同月九日代ト一社頭踊の終る成換て御旅所の假殿小昇入行列の始り小
ハ大鉾 勅裁の綸旨弓楯鎗長刀等此神具其技勝て計ふ一り
神樂以後ハ社司樂小乗り下巫の面ハ騎馬よて供奉一郷之
産子幼稚の者ハ白張烏帽子成着て奴隷此肩に据一遠近の
士女雲のどく 法手は小実ハ壯麗なる粧ハあり以前ハ通儀
七日と御下至九日成御上りと称一り今九日十一日成りつて
御上り御下り成唱ふ神樂ハ長崎村ハ農夫あつて之齊戒
沐浴一々多勢お圍んでふを肩に負り長先おつちて
警言術一薬師寺氏神室の次第成糾一々啓行とるを其外此

供吏供奉絡繹として排行嚴肅なる神樂御旅所に遷座
あり十一日還御此儀式九日の如く此日廟前鹿皮供を時
湯立神樂あり其事終りて流鏑馬始まる觀るもの堵垣の
おとく此等此式終りて互いにお祭りて退散す

○袖裏行列の式

但神樂或早き神具或持つもの
鳥帽子白長袴着て下目ト

大鉾 五木

皆白の絹衣着て三社の御紋藍布で洗む御紋ハ提の葉 兼方
三蓋板 住吉 三ノ巴 森崎 一本といた郷民三人代りて之持つ

猿田彦

脚立 六ツ

御旅所にて神樂
三基或おく

百合画

人これ或有し途申
乃て賽銭或受り

弓 数十張

空徳 楯

長刀 数十振

鎗 数十本

狸 緋虎皮投

鞘鎗 数十本

刀筒 数十腰

太刀 白鞘の大なるもの一振あり
高力氏乃奉納する所あり

法性造曹

蓋 数十

四神鉾

青黒黒白の緋旗或着て一平の旗あり
朱鳥玄武青龍白虎の四獣或おく

獅子 二匹

緋獅子或ありて
途中二人充てこれ被り

蓋 数十

小鉾 数十

纏 数十

沓 臺小おいて
これ或あり

割竹 二人

左右小立て
これ或く

勅裁繪旨

源方社取締掛街長

社用人

猿樂師

當人町

街長 太鼓

神鏡

臺ありて青糸の細
ワアスやこれ或持つ

薬師寺氏

長崎村里長

神樂 三基

一基ぶとた
駢列那也

大宮司

位階の紫束或
着け有雲不登

祝部

乗物又ハ野馬時
小より目トワ

神馬 三疋

社家

教人 騎馬小

此前後一郷の男女
跟後これ或御

供と称す

これ或あり後供吏供奉あり
之に略す

附 神樂御供排列の後
華街西町の傾城幼
より長小次系し

左右小立並び
舒くとして御供を
錦袴の袖裡後此蒙

翩翻と輕風小飄り金釵銀簪白日小輝ぎ清香衣袂様
其行列亦嚴重有り遠近の遊治見ふれがうえ小免死ひ
神馳て皆驚愕の契り汝奠けふ海を命一ひ花陽ひ
る美觀あり

祝島

祝嶋或ハ硫黄嶋深堀の西小河至長崎國志小出りと嶋の北
汝呼んで松浦瀉と一南の濱汝薩摩瀉と古一遣唐使
此船多く此所汝過るふらて遠小其名汝命ぞり今蕃夷
の未貢と海りの皆こにらて路汝取る相傳ふ嘗て俊寛

等に流さる後深江小よりて帰するをとく古本平家物
語小治承元年平相國の命として丹波少将成経平判官康頼
僧都俊寛三人汝肥前五硫黄嶋小流す二年安徳帝生ま
給ふ命とて天下小大救汝行はる成経康頼赦免汝得たり
獨俊寛のこぬにわづらうと二人甚々憐れ切りて竟小俊
寛氏伴多ひ出て鹿背の庄小入しが俊寛つる小鹿背よ於て
病で死しぬあらしの墓存せりと一り盛衰記竟造寺家の
日記此説とす白ト然ら小今の本誤りて薩摩の國小放ふ
下りとて薩摩小亦硫黄嶋の事疑うくハ是其名汝

混同せしものありむくや、嶋の内小僧都の蹉跎石成経漱水等の舊跡ありてに長福寺といふ一小寺あり堂前小石碑銘銘茂勸を

御崎

御崎觀音寺圓通山と號す御崎村なり和釘年中行基菩薩の初むる所あり往昔規模雄壯にして數十の僧房ありしが後元北賊徒追ひ侵す小遭ひ殃ににおんで遺り存する處を天文六年御崎備後守源廣重かさねて建つ寛文四年僧良圓募り修む今寺の前敷頃の田八即ち古寺は遺址

あり供する處の千手大士八行基菩薩に嘗て長良の橋に梁伐取りて七施の像を刻むに其一なり其材ハ榎の樹あり立身高さ七尺其製恰も長谷寺の像に似たり此寺昔より此勝區に靈跡極りて多し元亨釋書に釋教好嘗て横川の徳行と曰く諸乃徳地は遊歴して肥之御崎小いりる奇石異木あり事世小寺ありある所也といふ是なり

唐寺

唐寺ハ興福寺 東明山と号す元和九年亥年建
崇福寺 聖壽山と号す寛永六巳巳年建つ岡山唐僧起其福州
福濟寺 分紫山と号す寛永五戊辰年建つ岡山唐僧覚悔津州寺あり
之三箇寺あり

。大金

崇福寺あり萬人鍋といふ鍋の大き四石二斗に受く天和二年
當寺第四世唐僧千呆より此に鑄る此時長崎飢饉にして粥を煮て
多く餓草れりとの救ふといふ

。関帝堂

関帝ハ蜀漢の関羽字ハ雲長ありあり一
に尊び奉じて州縣おとに皆其祠廟有て晋くこれ祀り
関聖帝君と称す唐三ヶ寺皆奉祀せり

。媽姐揚

唐船湊不入て後媽姐揚といふ事あり素より船に媽
姐棚といふ船菟の神に祭る所と後けて天妃に像を安置
し海路の患難ありむとと祠暮小祈る既湊に來り
碇を入きて後ハ船中乃唐人悉く鏡内に移りて神
像を保護する事能はる事能はる唐三ヶ寺小輪番に
迎て捧げゆき在津の間此を獲て托するあり其行装ハ
香工船魂神小香花の唐人二人燈籠に左右小持ちて並びゆく次
に銅鑼を持ち二人左右小次小直庫長六尺半の指の此小赤木後ハ
此と係其次中央小老媽の像多くハ木像小後より團扇此ハ像
あり左右小侍女の像あり或ハ前ハ千里眼

の像又ハ神虎成置も有り
神虎玉神の使ワリ也

代臺上ハ安置して是を捧ぐ後より蓋傘成掲
ぐ守護の唐人西三人澤司吏目附添ひて途中十字街小廻りて
銅鑼成鳴し直庫と振る直庫成振る若ハ長袖の紫米成
兼ハ帽子成のふき傷成とありまた振ら
むとて身とも先づ直庫成袖の上小横之西足とりて地
上ハ心成文字成踏むとて至振り終つて東小行人と歎む
此ハ直庫の頭成東ハ向け西小行くと欲す此ハ西に向く
南北も向くかの如し然し上下ハ轉ハ左右ハ振り
手足進退種く小曲節成あり其手成数曲あつて曲々
皆名ありとて其間銅鑼成打鳴し此勢を助く寺小至て

ハ山門中門或ハ閔帝堂の前媽姐門媽姐堂にて銅鑼成鳴し頻に
直庫成振るあり他人若過ちて其前を犯し通る事あり改て
振り直をい之障魔汚穢成はし除くの志とあり其後
老媽の像及ハ直庫成媽姐堂に納りて鼓門に帰るあり出航
此前此像とてのみ守護し歸りて船中小安置を實小
聖朝の徳化廣遠ハて異邦の来貢絶わつとあり唯長崎の
繁栄のありを亦四海の繁栄あり

長崎土産 終

友人文高英長崎土産様以同画傍友侍
邪甘土風舞仕祭様可觀是余幸甚男山人
歌初一章今附之於卷末以庶世好雅之志云

下里無名氏



江戸溪齋池田英泉
我信門人

文齋磯野信春著^係画文齋

淨書

赤松 霍洲



剖刷

江戸

石上 松五郎 刀



唐紅毛小間物御土産之品数不長崎画圖吳玉人物錦繪款下直奉指上
長崎令熊治屋町角

弘化四丁未年春正月發兌

大和屋由平壽櫻

江戸
七ノ月

